

園芸と日本とジェイン・オースティン

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009984

園芸と日本とジェイン・オースティン

鈴木実佳

2016年はジェイン・オースティン(1775-1817)の『エマ』の出版(1816)から200年である。¹『高慢と偏見』の出版200年のときに、舞踏会、ツアー、パーティー、読書会、学会で盛り上がったように、各地でさまざまな催しがあったに違いない。多くの会員を擁し、一般向けのプログラムも組む北アメリカのオースティン協会は、今年の年次大会で『エマ』の200周年を記念し、「他の誰でもない、彼女」(No One But Herself)とテーマを掲げた。²一方、オースティン縁の地であり鉱泉リゾート地として18世紀に再興したバースでは、オースティン産業が盛んで、恒例のオースティン祭が催された(2016年9月9日から18日)が、各種集まりで読まれた作品は、なぜか『分別と多感』と『高慢と偏見』だった。³『エマ』の扉の年号は確かに1816年であるが、1815年12月には出版されて人々の手に渡っていたこともその理由のひとつだろうか。⁴出版後間もない1816年の春には、彼女は体調をくずし、それでも1815年に書き始めた『説得』を書

¹ 『エマ』は、オースティンの生前最後に出版の作品となった。2000部印刷され、彼女が結局得た金額は40ポンド弱であり、必ずしもよく売れたわけではなかった。Edward Copeland and Juliet McMaster, eds., *The Cambridge Companion to Jane Austen* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), p. 25.

² オースティンの作品『エマ』についての発言の記録(執筆を始める際にオースティンが言った言葉として記されている)と、『エマ』の中の描写を踏まえている。‘I am going to take a heroine whom no one but myself will much like’ James Edward Austen-Leigh, *A Memoir of Jane Austen*, Facsimile Edition (Folcroft, Pa.: Folcroft Library Editions, 1979), p. 148. ‘Mr Knightley must marry no one but herself’ Jane Austen, *Emma*, ed. Richard Cronin and Dorothy McMillan, *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), p. 444. [Both underlines mine]

³ <http://www.janeaustenfestivalbath.co.uk/2016programme/>

⁴ 1815年12月11日付けで、彼女は出版者であるJohn Murrayに対して、一般よりも数日前に、後のジョージ4世(当時the Prince Regent)に届けるように依頼している。Deirdre Le Faye, ed. *Jane Austen's Letters*, 3rd ed / collected and edited by Deirdre Le Faye. ed. (Oxford ; New York: Oxford University Press, 1995), p. 304. 現物が届いた旨知らせる札状(秘書/図書係のJames Stanier Clarkeから)は、「1815年木曜日」の日付で、これは12月21日木曜日と推測されている。

き終え、更には未完に終わる『サンディトン』を1月に書き始めて、そして1817年7月18日に生涯を閉じることになる。来年2017年は、ジェイン・オースティン没後200年を迎え、世間の注目が集まり、様々なイベントで盛り上がり、オースティン作品が更に読まれる契機となるだろう。記念の年を人が喜ぶのは、商業主義的理由はさておき、ものごとが継続していることを確認し、過去の人々との価値観の共有を楽しみ、あるいは部分的な変化を認識し、そして未来への手がかりをみつけることができるからだろう。彼女が生涯の最後のおよそ10年間で過ごしたチョートン・コテッジの道に面した壁には、死後100年記念の1917年に記念版が据え付けられた。そこには、オースティン作品の古びない魅力を決定づける一文が刻まれ、20世紀初頭の米英のオースティン・ファンの熱意と協力を明らかにした。19世紀初頭と20世紀初頭の事実につけ加えられた一文は、それ以降訪れる人々にむけたメッセージとなり、永続性を保持する仲間の連帯感を生む重要な役割を果たしている。

ジェイン・オースティンは1809年から1817年までここで過ごし、彼女のすべての作品はここから世に送り出された。この国とアメリカの愛読者が協力してこの記念版を設えた。彼女がみせた技・芸術は、決して古びない。⁵

その100年記念と同じ年、つまりオースティンと私たちの時代のちょうど真ん中で、オースティン作品と日本の造型を関連づけて考察したイギリス人がいた。レジナルド・ファラー (Reginald Farrer, 1880-1920) である。彼は、珍重される美しい植物を求めて中国や日本を探検したプラントハンターである。⁶ 特に、ロック・ガーデンや盆栽の趣味の紹介と浸透に貢献した人物であり、「新たな」植物とガーデニングの素材や造園方法を持ち込んだ彼の業績は、園芸の世界において長く称えられることになる。⁷ 未だ西洋人の目に触れぬこの上なく美しい

⁵ 'Jane Austen lived here from 1809 to 1817 and hence all her works were sent into the world. Her admirers in this country and in America have united to erect this Tablet. Such art as hers can never grow old.' The Jane Austen Centenary Booklet (<https://austenonly.files.wordpress.com/2012/06/jane-austen-centenary-brodnax-mmxii.pdf>).

⁶ 白幡洋三郎『プラントハンター』(東京:講談社, 2005).

⁷ Jenny Uglow はファラーを「ロックガーデンの父」と称している。Jennifer S. Uglow, *A Little History of British Gardening* (London: Chatto & Windus, 2004), pp. 250, 259; ファラーは拳がっていないが、1890年代の日本庭園熱については、Charles Quest-Ritson, *The English Garden: A Social History* (London: Viking, 2001), pp. 202-3; Brent Elliott, *The Royal Horticultural Society: A History, 1804-2004* (Chichester: Phillimore and Co Ltd, 2004), pp. 122, 207, 272, 366. 王立園芸協会は、ファラー他のヒマラヤ行きに200ポンドを提供したが、賞は授与しなかった。その埋め合

植物を求めて、「未開の」土地を進んでいた彼は、オースティンを愛読し、小説セットと共に旅していた。⁸ 東洋を旅するようになってからの彼の日常生活は、未知の土地への冒険に満ち、彼が最期をむかえたのは、現在の中国とミャンマーの国境付近の（中国では岷山と呼ばれる）山中でのことだった。本稿の目的は、ファラーの異文化理解のしかたを、差異化の視点と文学的共通性から考察することである。

彼の『アジアの庭——日本の印象』（1904）での日本の情景描写は、雲、靄、霞、霧、空気の描写から始まる。日本は、水墨画のような微妙な色の重なりと共にあり、そのヴェールの陰から立ち現れてくる。長崎に到着しつつある彼が見た日本は、一面の雲のなかの灰色である。「流れる雲のなかから切れ切れに灰色の塊が仄かに立ち現れる」。空気がヨーロッパのそれと比較され、日本の風景、そして彼が最も興味をもっている植物の違いは、大気の差に帰せられる。湿度の高い日本を、彼は上陸した後の自分の汗や不快指数といった体感で感じるのではなく、外から眺めて目で感じ取る。長崎の「空気は澄んでいるが水気に富んでいる。」⁹

澄み切った日本の大気を通すと、色が豊かで抑制のきいた純粹さをもって目にとびこんでくる。そうすると、青や深い緑が、他のどこでもみられない美しさを帯びる。日本では、風景は、静謐に澄んだ水を中景において変化させて見ているような気がして、藍や董色の光景にさらなる柔らかな豊かさを与えている。…日本では、無限に多様な空気のせいで線は柔らかみを帯び、色は芳醇になる。夜明けには、日本の絵でよく見る情景をはっきりと認識することができる。あらゆる小谷、丘の間、渓谷に、ごく繊細な膜のような靄がたちこめて、木々の輪郭がだんだんと現れてくる。それは幽霊のようにどこも同じように一定して、細部は何も見えず、動かず、

わせか、1959年以来毎年ファラー賞（Farrer Trophy）を出している（pp. 207, 366）。

⁸ 馴染みのある土地から離れて適合しようとするヒロインが描かれていることと、「ノスタルジア」についてはNicholas Dames, “Nostalgia,” in *A Companion to Jane Austen*, ed. Claudia L. Johnson and Clara Tuite (Oxford: Wiley-Blackwell, 2009), pp. 413-21など参照。C. Johnsonは、Farrerをヴィクトリア時代の熱狂的な賞賛モードに批判的な立場をとりながら、それでもその熱狂を継承していると指摘している。彼がオースティン作品の豪華版出版プロジェクトを提案していたことから、彼を冷静な学者としてのチャップマンと比較している。ファラーは第一次世界大戦期の愛読ぶりを示す例の一人としてあげられている。Claudia L. Johnson, *Jane Austen's Cults and Cultures* (Chicago & London: The University of Chicago Press, 2012), pp. 97-8, 105-06, 118-19.

⁹ Reginald John Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan* (London: Methuen & Co., 1904), pp. 1, 2.

けれども蔭と区別できるかできないかのこの世のものとは思われぬ形がわかる。蔭を背景に、その形は変化のない色という朧気な厳密性をもってそこにある。¹⁰

彼は湿り気を含みつつも澄んだ空気が作り出す「朧気な厳密性」に魅せられてしまっている。他に、「甘美なかび臭さ」、「魅力にみちたがらくた」といった撞着語法を駆使して彼は日本を理解し、描いていく。¹¹

長崎から神戸を経て、横浜に向かった彼が富士山を初めて見たときの驚嘆も詳しく読んでおこう。富士山はあまりにも美しい威容を誇り、靈験あらたかで、ファラーにとって動かぬ山というよりも、異世界から東の間この世を訪れている人格あるいは神格としてとらえられているようで、「彼」と称されている。

夜明けに蒼白く見える富士山は、陸地と海の上に聳える。彼は幽玄に白く、ひとときだけ留め置くことができた幻の軽妙さをもちながら、荘厳な構えをもつ。幻は陽がさしていくにつれ半時ほどで霧消するに違いない。この偉大な白い山は、あまりにも美しく、儚く消えてしまうのではないかと思われる。即座に、夜の残骸のなかに漂失するに違いない。あまりにも夢のように実体がないようで、あまりにも幻想的に美しくそこにあり、あまりにも浮き世離れして、その輪郭はくっきりとした完璧性をもつので、この平凡な世の中の現実ではなくて、神的想像に属していると感じさせる。富士山の栄光は、つまらない人間の間断ない余計なお世話のしみをつけられ、汚され、品位を貶められている。…美は、明らかになったからといって美でなくなるわけではない。世界を飛び回っている者がありふれた贅辞を編み出したとしても、神々しい富士山から荘厳さを奪うことはできない。頻繁に褒められても薔薇がその価値を失わず、つまらない女があまりにもよく身につけてもダイヤモンドがその洗練された輝きを失わないのと同じことである。…日本に行った人に富士山礼賛を控えよと命ずることは、不可能を要求することである。¹²

筆を尽くしてその幽玄の美を描写したあとで、ファラーは自分たちの言語、英

¹⁰ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 2-3.

¹¹ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 12, 9.

¹² Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 4-5.

語の表現の貧しさを認識していることわりをいれる：「そのように神々しいモデルの、この世のものでないような輝きを忠実に描写するための純粋な語調を私たちの言葉はもっていない。」¹³

ファラーが見る日本は、西洋人としての自分たちの日常や常識とは異なる「あちら側」の別世界である。書物の冒頭で印象的に風景を覆っている霧でさえも、「私たち西洋人が知っている意味での霧ではない」。¹⁴ 主に北斎や河鍋暁斎の作品を物色することが話題になっている買い物の章では「日本は貧乏人の天国であり、富者の夢である。」¹⁵ そのなかにある「汚点」は、西洋的なもの、あるいは西洋人が持ち込んだものであり、自虐的に描かれる。長崎は、美しい日本の中の醜悪な汚点であって、「美女ヘレネーの類の疫病跡あるいはハンセン病による皮疹」であり、「天国の門にある港町ポーツマスの別館」である。¹⁶ 「横浜は、ヨーロッパ的な街で、ヨーロッパ人のためにヨーロッパ人が建設した。それで、醜悪と傲慢以外には注意を向けるべきところなどない。そのような様子でこの世で最も栄光に満ちた光景を横浜の住居は汚染しているのである。」¹⁷

ところで、道中オースティンの小説を携えていた彼のもともとの野心は、作家として広い読者層に訴える文章を書くことだった。¹⁸ 「博識の人々を憤怒させることなく、一般の読者の関心を誘い、一般人を飽きさせることなく学者を満足させることが私の目標である」と彼は記している。¹⁹ そして彼は旅行記と園芸の著作に、オースティン作品への直接の言及を散りばめた。²⁰ 日本の盆栽を紹介するにあたって、オースティン作品の喩えを駆使している。東京の家々の庭を見て、盆栽に感嘆し、まるでブロンテの『高慢と偏見』評の「丁寧な柵をめぐらし、非常に丹精を凝らした庭」の喩えを、面白がってさらに突き進めたような描写をしている。²¹ オースティン愛読者であり、庭を主たる関心事と

¹³ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 5-6.

¹⁴ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, p. 3.

¹⁵ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, p. 55.

¹⁶ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 1-2.

¹⁷ Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, p. 7.

¹⁸ Reginald John Farrer, *On the Eaves of the World*, 2 vols. ed. ([S.L.]: Theophrastus, 1977), I:19.

¹⁹ I want to interest the general public without moving the learned to rage, and to gratify the learned without causing the general public to yawn. ([1917] 1926, v. 1: 19) *On the Eaves of the World* (1917), quoted in Mather, 50.

²⁰ Jeff Mather, 'Camping in China with the Divine Jane: The Travel Writing of Reginald Farrer', *Journeys* 10-2 (2009): 45-64.

²¹ 'a carefully fenced, highly cultivated garden', *Jane Austen: The Critical Heritage*, ed. B. C. Southam, vol. 1 ([S.L.]: R. & K. Paul, 1968), p. 126.

している彼が、オースティン作品と、整った庭の関連づけを看過するはずないのである。

[小さな盆栽の木々には] どこにも欠点を見いだせない。眼を欠点探しから解放して休ませてくれるのである。それで、このような木々を見ると新奇な休息の感覚を得る。木々の非の打ちどころない曲線は、ジェイン・オースティンの一節が描く非の打ちどころない曲線から受けるような、こころを和ませる味わいと同質の味わいを与えてくれる。付加すべきものも、除去すべきものもない。そこで、批評は眠り、魂はただ楽しむだけの余裕をもつ。一方、この多彩な世界の他の喜びは、どんなに優れたものであっても、批評の機能を休ませてくれることなく敏感に保つので、疲れるのだ。この木々ならば、満ち足りることの喜びを教えてくれる。²²

丹精込めた盆栽とオースティンの文章は、どちらも過不足なく完璧に計算された造型であり、それを享受する者の感性の余計な緊張を静かに解くというのである。ここでは、彼の着眼点が、イギリスの読者にとってはまだほとんど馴染みのないエキゾチックな日本の庭の魅力を、オースティン読者が共有している理解で説明しようという試みとなって表現されている。

日本の文化とオースティン文学を重ねて語ることの面白さは、日本でオースティン文学を読む私たちにとって魅力的であり、大いにファラーへの興味をかき立てる。しかし、これは単に彼の個人的嗜好に帰するものではない。彼は、大英帝国の一員として、異質の文化圏との接触を通じて、時に偏見に満ちた見解を述べる一方で、自らを知り、人類の文化に普遍性を見いだしながら、文化の個性を相対化して評価するモダニズムの時代を体現していた。アジアとの接触が促したファラーがもったオースティン文学を読む視点は、日本の私たちにとって特別の意味をもつと考えられる。彼の視点からみた日本は、大いに特殊性をもち、作家を志したファラーがその文才を駆使して描きあげる。一方、彼が最も興味をもって見た日本の庭については、面白いことに彼は既に自分が備えている嗜好からの喩えで読者に提供するのである。その理解の仲介者になっているのがオースティンである。そこにオースティンを位置づけると、時間的・空間的・文化的に、オースティンが直接的に属していたものとは異なる

²² Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan*, pp. 18-9.

背景をもつ読者の視点からも共有できる、普遍的要素を探ること近づくことができるかもしれない。

1987年出版の *Critical Heritage* において、1917年のファラーの論文は、歴代の論考のなかでもオースティン作品におけるアイロニーの重要性を指摘したシンプソンと並んで双璧をなし、最も定評のあるオースティン論であるとの評価を受けている。²³ C・ジョンソンも、それが20世紀を通じて重要性をもったことを支持し、オースティンの世界のユートピア的ではなく、偶像破壊的な痛切な現実性を重視している点に注目した。²⁴ ファラーが『エマ』をオースティン作品の精髓であって特別な作品と位置づけたことは、最近の全集の前書きでも触れられている。²⁵ 勿論、100年前の論考であって、凌駕された面もあるが、オースティンの死後100年を経て書かれた論文を、それから100年経過した今、改めて振り返ってみると、文学が時代を跨がって果たしている、もしかしたら不変の役割の一端を再認識できるかもしれない。その論考のなかで、彼はオースティンの普遍性をシェイクスピアと同様にとらえて、戯曲と小説では、戯曲のほうが舞台や役者の助けを借りることができるので、小説での普遍性を達成しているオースティンの方がより難しいことを達成していると述べている。小説の映画化、ドラマ化を享受した上で小説を読んでいる私たちにとっては事情が異なってきたが、普遍性を成す作家としての本質についての指摘は、大いに参考になる。彼の評価では、彼女は「人間の本性と同じだけの拡がりをもっている」。また、「非常に徹底的で変らぬ献身をもって真実を追求する」作家であり、「課題設定を愛し、彼女の作品の中でも最も難しい、手の込んだ課題設定を行って、最も見事にそれを解いてみせたのが、エマである」と論じている。²⁶

チョートン・コテッジの「古びない」というひと言もベン・ジョンソンの有名なシェイクスピア評も、時間軸にのせて永遠性を褒め言葉にしているが、異文化との接触をもったファラーの評価は、時間を越え、国境を跨ぎ、言語や文化の壁を乗り越えようとするところにオースティンを位置させるものだった。他の様々な風景や物については、イギリスと日本の間にある差異をあぶり出す

²³ B. C. Southam, ed. *Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940* (RKP, 1987), p. 245[ファラー論文導入部]。シンプソンについては、B. C. Southam, ed. *Jane Austen : The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1987), pp. 2, 31, 241-65参照。

²⁴ Johnson, *Jane Austen's Cults and Cultures*, pp. 105-06.

²⁵ Austen, *Emma*, xxix.

²⁶ *Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940*, ed. B. C. Ed Southam (RKP, 1987), pp. 246-51, 254, 266.

ことに注意と文才を向けたファラーが、共通性を見いだし、それを伝えるときに頼ったのが、オースティンであった。彼にとってオースティンは、普遍的価値観を代表し、その普遍性を仲介することにより、文化の特殊性は、理解可能になり、伝達可能となり、そして持ち帰って実践することもできた。ファラーから100年を経た現代の私たちにとって、国境や文化の壁の意識は薄く、オースティンは既にそれを越えた存在になっているのかもしれない。

Austen-Leigh, James Edward. *A Memoir of Jane Austen*. Facsimile Edition. Folcroft, Pa.: Folcroft Library Editions, 1979.

Austen, Jane. *Emma*. The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen. edited by Richard Cronin and Dorothy McMillan Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

Copeland, Edward, and Juliet McMaster, eds. *The Cambridge Companion to Jane Austen*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

Dames, Nicholas. "Nostalgia." In *A Companion to Jane Austen*, edited by Claudia L. Johnson and Clara Tuite. Oxford: Wiley-Blackwell, 2009.

Elliott, Brent. *The Royal Horticultural Society : A History, 1804-2004*. Chichester: Phillimore and Co Ltd, 2004.

Farrer, Reginald John. *The Garden of Asia: Impressions from Japan*. London: Methuen & Co., 1904.

———. *On the Eaves of the World*. 2 vols. ed. [S.I.]: Theophrastus, 1977.

Jane Austen : The Critical Heritage. edited by B. C. Southam. Vol. 1, [S.I.]: R. & K. Paul, 1968.

Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940. edited by B. C. Ed Southam: RKP, 1987.

Johnson, Claudia L. *Jane Austen's Cults and Cultures*. Chicago & London: The University of Chicago Press, 2012.

Le Faye, Deirdre, ed. *Jane Austen's Letters*. 3rd ed / collected and edited by Deirdre Le Faye. ed. Oxford ; New York: Oxford University Press, 1995.

Quest-Ritson, Charles. *The English Garden : A Social History*. London: Viking, 2001.

Southam, B. C., ed. *Jane Austen : The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1987.

———, ed. *Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940*: RKP, 1987.

Uglow, Jennifer S. *A Little History of British Gardening*. London: Chatto & Windus, 2004.